

催眠？

そんなものでキムンのはずがありません



「よおスミリーの姉さん。」

「俺覚えてるっ。」

「あなたは昨日私に

負けて追い出された方ですね。」

「催眠アプリ…？」

そんなのできるはずがありません。」

「ん…何でじゃ、これは。」

「今日は違うっ？」

「また、お尻を蹴られたくて
いらっしやいましたか。」

「キモイのでカジンから出ていただけませんか。」

「頭の中がぐるぐるして」

「あうう…」



「まず、俺はきみの『マスター』だ。

俺の命令に絶対服従せよ。」

「足を広げ。」

「はい。マスター。」

「尻を突き出せ。

ちんぽを打ち噛ましてやるよ。」

「わかりました。マスター。」

「俺の指示に疑問を持つな。

俺が触るところはやけどしたように熱くなる。」

「っ…はあ。」

「キヤメロツトのオーナーさまも大したことないな。

昨日の屈辱。その身で返させてもらおう。」

「俺のちんぽに子宮が刺される度に性感が強まる。
だが絶頂できない。」

「うっ…ん…いやだ…」

「生意気だ！このアマ！」

「そのでかい胸が目の前で揺さぶるから勝てなかった！」

「もうしわけない。お許るしを！」

「じゃてめえのでか尻を使ってサービスしてみろ！」

「はい。私はマスターのザーメン便器ウサギです。

私のおまんこを便器のように自由に使ってください♥」

「おおっ！胸押しつぶされる♥」

「はんきもちいい♥♥♥」



「くっっ…あん…はん」

「反応がつかまらないな。」

「さあ今から気が戻る。しかし、体は動かない。」

「うっ…私は一体…。体が動かない？」

「貴様…私に何をしだ！」

「くっく。やれやれ。てめがバカにした催眠術で俺好みの女に変わせてもらった。」

「卑劣！絶対許さない！」

「はいはい。そろそろ出すから妊娠しろ！」

「だめ…くっっ…うっ…ん…はっ！」

「終わりだ！性感100倍！

それについて絶頂が止まらない！」

「いや！そんな…の…うおっ♡うう…っ♡

あああ…あ♡絶頂…が終わら…ない♡」

「おあらせで…たすげでえ…
うっ…うぐっ…♡♡♡♡♡」